

私の会社の近所には世界一のテーマパークがあり、電車の中で出会う楽しいような家族連れや幸せそうなカップルはこちらまで嬉しい気分にはさせてくれる。しかし、時には「?????」と疑問符が沢山付く出来事に遭遇することがある。混雑した車内で席が一つ空いた場合、親は必ずと言っていいほど子供を座らせる。祖父でさえ孫を座らせ、自分たちは立っている事実を目の当たりにし、「これは優しさの履き違えだ」と感じている。

子供の頃、厳格な父親に育てられた私は電車の中で席が空いたら、親が座るのが当然と無意識のうちに教育されていた。「子供は立っているなさい」——父の教えは単純明快であった。母は優しかったが、お年寄りが乗車してきた際には「席を譲りなさい」と命ぜられた。そのおかげで今でも人生の

必要十分条件



先輩方には席を譲る習慣が根付いている。最近は一入っ子が多く、家族中の愛情が注がれているが、厳しさも教えての優しさこそ本当の愛情ではないだろうか。祖父父母や親を立てて座らせてもらった孫や子は将来、見ず知らずのお年寄りに席を譲る気持ちが芽生えるのだろうか。

「タフでなくては生きていけない。優しくなければ生きる資格がない」。これは米国の作家、チャンドラーの名言であるが、人間は根本として優しさが必要であり、その過程において厳しさが不可欠であると説いている。厳しさと優しさは表裏一体。プライベートでも

ビジネスでも社会ではその二つの要素が必要十分条件として成り立っているのが真である。

ビジネスの世界において、現代の激しい競争世界に勝ち残るためには当然ながら厳しさが絶対条件であるが、最近はそのばかりが目立っているような気がしてならない。全てはコストが第一である毎年恒例の原価低減は安価競争を助長し、そこにはものづくりの本質である「高品質の製品実現」から目標が外れていく危険性をはらんでいる。「よの良の製品をよの安く」は古今東西のテーマであるが、その目標はどちらが先行するのであるか。「よの安く」ばかりに執着すると、そこには「よの良」ものづくりに対する向上心は後回しになるような感じがする。

「やらねば 人は動かじ」
連合艦隊司令長官、山本五十六の名言だが、この言葉にはあまり知られてない続きがある。

「話し合い 耳を傾け承認し 任せてやらねば人は育たず」
「やっている 姿を感謝で見守って 信頼せねば人は実らず」
明治生まれの軍人にして、この優しさである。はたして自分はどうであろうか。厳しさに傾注してないか、優しさにだけ判断しているのでは——見つめ直すことと反省することときりである。優しさと厳しさは必要十分条件。そのどちらが欠けても物事は成り立たない。いつの時代でもどんな時でも、そのバランスこそが生きていくのに必要不可欠であると感じている。